



Title	On Being Human in a More-Than-Human World : A Feminist Ecocritical Interpretation of Ernest Hemingway's Novels
Author(s)	Ng, Sion Lay
Citation	大阪大学, 2021, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/82266
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏 名 (NG LAY SION)	
論文題名	On Being Human in a More-Than-Human World: A Feminist Ecocritical Interpretation of Ernest Hemingway's Novels (非人間中心視点からアーネスト・ヘミングウェイの長編小説を考察する)
論文内容の要旨	
序論 アントロポセンの時代におけるヘミングウェイ研究の再考 博士論文は、九十年代から盛んになったフェミニスト・エコクリティカルな視点(ポスト・ヒューマニズム、マテリアル・フェミニズム、マテリアル・エコクリティシズムを含む)からアーネスト・ヘミングウェイが執筆した『日はまた昇る』、『武器よさらば』、『誰がために鐘は鳴る』、『老人と海』、『エデンの園』を中心的に分析し、作品の中に潜んでいる非人間中心の考え方や立場などを掘り出すことを目的とする。序論において、まず、ヘミングウェイの伝説および従来のヘミングウェイ研究における両立的な論点を概観しながら近年のヘミングウェイ研究の動向や新たな可能性を提示する。次に、二十一世紀「アントロポセン」の時代におけるヘミングウェイ研究の重要性について論じ、ヘミングウェイの作品の中に存在する「エコロジカル・アンビバレンス」は我々現代読者の「鏡」といったような効果をもたらすことを主張する。ヘミングウェイ作品の中の人物たちは如何なるエコ的・エゴ的な心理や考え方を形成してきたのかを分析することにより、自分が持っている人間中心・非人間中心の考え方をより一層理解することができ、更にこの複雑で多様な生体が存在する世界の中に我々人間の持つべき「立場」を改めて考え直す機会が与えられるだろうと考えられる。 第一章 回復のポリティクスへ ——『日はまた昇る』におけるジェイク・バーンズによる他者性の受容 『日はまた昇る』において、第一次世界大戦後の社会における主人公ジェイク・バーンズの身体的喪失、心理的トラウマが描写されていると同時に、彼の自然による自己回復も書かれている。そこで本章は、後者の方に焦点を当てながらジェイクの「自然による自己回復」を三段階に分けて再考察し、ジェイクは多重的な体験を通して自らの他者性を改めて受け入れたことを論証する。 まず、ジェイクのバイオンヌでの釣りの旅は「回復の第一段階」である。自然の中で釣りをしたジェイクは再び活気を感じ、生き物たちの豊かな個性や生命の尊さに対する認識が深まった様子が見られる。その一方、ジェイク、ハリス、ビルとの付き合いの中から精神的な劣化による消費主義の増大というジェイクの心理的現象が読み取れる。次に、「第二段階」とされるジェイクのパンプローナでの旅において、闘牛を観ていたジェイクは人間の本性と生命の価値についてより深く考えることができ、また自分はまるで去勢牛のような存在であるがゆえに	

ブレッドとの愛情関係の維持は不可能だという認識を得たようである。その結果、ジェイクはサン・セバスチャンへ一人旅をした。そこで彼は海や空といった媒体を通して自分の中にある「声」、自分の「体」、外界といった三つの「他者」と直面し、「ありのままの自分」を初めて受け入れたことが分かる。このように、ジェイクの「自己喪失」から「自己実現」までのプロセスを見てみると、生態系の回復と身体的・精神的な回復とはパラレルな関係にあることが分かる。これは「回復のポリティクス」の一点目である。また、世の中ではより寛容的な姿で「他者性」(外見、体型、人種、性、ジェンダー、セクシュアリティ)を受容すべきだという点が二点目であると考えられる。

第二章 「腐った」モノについて ——エコ・ゴシックの視点から『武器よさらば』をみる

第二章は、第一次世界大戦のイタリアを舞台とする『武器よさらば』の中の腐った・壊れた・汚れたモノに焦点を当て、エコ・ゴシックの視点を通してそれらの物事の描写の裏に潜んでいる反戦争的な観点かつそれぞれのモノ自体の主体性を引き出すことを試みる。ここで言っている「モノ」とは、食べ物、人間の生体、ランド・タウンスケープ、雨といった4つのモノを指す。

まず、「腐った食べ物」の考察を通して、「食べる」という行為は「殺す」という行為と並置されていることが分かり、戦争はグロテスクな形の「共食い」であることが明らかになる。次に、人間の「生体」はどのように戦争、軍事、医学の言説によって断片化されているかを考察し、またその断片化された身体はいかに主人公の「自己完全性」に影響を及ぼすのかを論じる。そして、主人公フレデリック・ヘンリーのナラティブを通して彼が持っている非人間中心的な意識を明示する。ここでフレデリックが自分の人間の生体と自然の「ランドスケープ」を結び付けることは一種の反戦争的な表現あるいはエコ・レジスタンスであると考えられる。続いて、本論はフレデリックによる自然のゴシック化とロマンティック化について考察し、ゴシック化された雨・雪とロマンティック化された雨・風は人間中心主義を支える戦争に対する「集団的なレジスタンス」として機能していることを示唆する。このように、小説の中に描写されるモノはそれぞれ重要な役割(非人間中心主義・反戦思想)を持っていることが分かる。更に、それぞれのモノは独自の「エージェンシー」を持っていて、我々人間の主体性の形成に大きな影響を及ぼすことが明らかになる。

第三章 エコフェミニスト・アンドロジニーを原型に ——『誰がために鐘は鳴る』におけるロバート、マリア、ピラールの関係性

『誰がために鐘は鳴る』の中にあるロバート・ジョーダンやマリアやピラールの人物像はアンドロジニーと陰陽論の合体しもの、いわゆる「エコフェミニスト・アンドロジニー」を基盤として構築されたと言っても過言ではない。なぜなら、小説の中に “We will be one now and there will never be a separate one...I will be thee when thou are not there” (263) といったような「一体化になる・ワンネスの描写」が多く見られるからである。また、「一つの中に二つ、二つの中に一つ」という考え方は陰陽論やアンドロジニーの形而上学において重要な要素だから

である。本章では、スピリチュアル・アンドロジニーおよび陰陽論の視点から①主人公であるロバートとマリア、②ピラールとロバートとマリア、③ロバートと自然、といった3つの関係の仕組みに絞って考察を行い、この小説の人物構造の原型はアンドロジニーであることを論証する。

まず、ロバートとマリアの関係を見てみると、二人とも最初は孤立した状態であったが、何度の「性的・心理的・スピリチュアルな結び」を通して遂に一体化した両生具有のような精神的状態へと変容していくことが窺える。次に、ピラールのアンドロジニーの特徴に焦点を当て、彼女の両生具有の性質、シャーマニズム、ストーリー・テリングの能力がマリアとロバートの精神的成長に深い影響を与えたことを明らかにする。最後のセクションでは、ロバートがスペインの大地と一体化した描写について考察する。ここでロバートの自然との一体化が、愛人マリアとの結合や一緒に戦っていた「スペイン人家族」との結合に深く関連していることが分かる。このように、この小説の中に頻繁に現れる「一体化」、「結合」、「性的・精神的・スピリチュアルな結び」といったキーワードが「一つの中に二つ、二つの中に一つ」という原理を反映することで、『誰がために鐘は鳴る』の人物構造の原型はエコフェミニスト・アンドロジニーであることが明らかになるだろう。

第四章 「彼の目は海の色と同じだ」 ——『老人と海』における色のエコロジーとエコロジカル・ポストヒューニズム

本章では、カラン・バラッドの「イントラ・アクション」というコンセプト及びヨハン・ボルフガング・フォン・ゲーテによる「色のエコロジー論」を用いて『老人と海』における非人間的な視点とその意味を明らかにする。まず、今まで言及されていた「個人主義」と「相互依存」に関する議論を提示する。そして、本論は、個人主義と相互依存のテーマを更に拡大させるために、主人公サンディアゴの「色」との関係、つまり、色の生態学、色の象徴性、色の人種的な意味合い、といった点に焦点を当てて分析を行う。

第一節では、老人サンディアゴに現れる孤独感や他者性といった「ブルーの気分」に言及する。続いて、青い海に所属する暴力性(男性性)がサンディアゴのエゴイスティックな欲求を引き起こしている一方で、海のヒーリングの性質(女性性)が彼のエコロジカルな意識に刺激を与えることを示唆する。海と同じように、サンディアゴのエゴイスティックな心理とそれに対するエコロジカルなマインド・セットは、彼の不器用な左手と機能する右手に関する描写、黒人との腕相撲の思い出、魚狩りの戦いのエピソードに埋め込まれた開拓者・奴隷という権力関係からも読み取れる。こうして常に「エゴ対エコ」という思考モードに束縛されるサンディアゴだが、青い海によるヒーリングの影響の下で自然界との感覚的な繋がりが強くなり、色のエコロジーの発見に繋がる。ここで色、光、青い海、海の中の生物、といったものは一種の「カウンター・ナラティブ」として機能していることが分かる。最終節において、小説の皮肉な結末における相互依存、非人間中心主義、反帝国主義を強調するエコセントリックな観点を明らかにすることで、この小説はマテリアル・エコセントリックな作品として見なすことができると提唱する。

第五章 象の目とマジ・マジ戦争 ——非人間中心的な視点から『エデンの園』の中の「アフリカ物語」を読む

第五章は、ヘミングウェイの死後出版の『エデンの園』の中のメタフィクションである「アフリカ物語」における非人間中心的な視点かつ反帝国主義を明らかにすることを試みる。第一節では、動物知性論を用いて八歳の主人公デビッドと象との共感的な関係を分析し、デビッドの持つ非人間中心的な視点を明らかにする。それに対して、人間中心的な視点を持つデビッドの父親は自らのプライドのために象を殺した。象の「死」を目撃したデビッドは父親に対して嫌悪感を持つようになり、彼のことを尊敬できなくなる。また、デビッドは象の死を自分の死へと投射させ、成人になってもこのトラウマが消えない。

第二節において、成人したデビッドによる「アフリカの物語」の執筆の内容とプロセスに焦点を当て、マジ・マジ戦争の重要性と「書く・思い出す」（“remembering”）という行為を再分析する。まず、マジ・マジ戦争を引き起こしたデビッドは反帝国主義的な視点を主張することが分かる。次に、何度も勇気を出して「象の死」の部分を書いたデビッド、ついに自らの罪悪感に直面し、トラウマから解放されたデビッドの中には、ある一種の「非人間中心的・ポストコロニアルな男性性」がみられる。興味深いことに、この父子はヘミングウェイの心理的葛藤から生まれた産物であり、彼らはヘミングウェイの分身であることが分かる。

結論 再構築されたヘミングウェイの「文化生態学」と「アメリカン・ドリーム」

以上、各ケース・スタディを通してヘミングウェイの持つ非人間中心的な意識を引き出すことができた。ここで考察をさらに深めると、彼の持つ非人間中心的な意識は「家」という概念と関連していることが分かる。ヘミングウェイにとって、実家であるオークパークよりもヨーロッパの山・アフリカの森・カリビアン海の方が「家」に近い存在のようである。また、彼の作品の中でも人間と自然との「一体化」の描写が多く見られる。こうしてヘミングウェイの伝記や作品から「自然・自然界の生き物＝家・家族」という比喩的な構造が読み取れる。この見解は、世界中で進んでいる森林破壊、都市化、工業化によって人間が自然の生態系の一部と見なされなくなった「自然＝ただのモノ」という考え方とは対照的で、人間を自然のルーツに還元するための重要な要素だと考えられる。こうしてヘミングウェイの作品は読者に人間中心主義を考え直す機会を与える。

続いて、ヘミングウェイの作品に埋め込まれた人間と非人間の融合の促進は、彼の文学を「文化生態学」(cultural ecology)の一形態と見なすことを可能にする。ドイツ人の生態学者が言うように、文学は文化的言説と知識のシステムの中で生態学的な力のような機能を持つ。彼によると、作者は自然界のエネルギーやコミュニケーションを文化的エネルギー及び人間の分かる言語へと翻訳する働きをする。こうして意識を無意識に、心を身に、文化を自然に、外部の生態系を内部に再接続し、持続可能性をより倫理的な概念にする可能性を示すヘミングウェイ文学は一種の文化生態学と見なすべきである。

最後に、ヘミングウェイとアメリカ人としてのアイデンティティ、それと深く関連している「アメリカン・ドリーム」との関係について考察する。アメリカン・ドリーム（より良く、豊かで、充実した生活）を達成するために、物質的な満足以外にも知的・道徳的・精神的改善（自由と平等）が不可欠だと言われているが、時間が経つにつれて前者が後者よりも重要だとされてしまうことになる。ここで「文化生態学」を育成するヘミングウェイ文学は後者の重要性を再度引き出す機能を持つ。そして、本論の各事例は、より環境に配慮したアメリカン・ドリームの移行が、環境幸福だけでなく、個人及び社会の幸福も促進する可能性があることを示唆している。したがって、再構築されたヘミングウェイのアメリカン・ドリームは今後我々が持続可能な未来を構築するために必要とされるものである。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (Ng Lay Sion)			
	(職)	氏 名	
論文審査担当者	主 査	教授	渡邊 克昭
	副 査	教授	貴志 雅之
	副 査	教授	畑田 美緒
	副 査	教授	中村 未樹
	副 査	准教授	小杉 世

論文審査の結果の要旨

本博士論文、“On Being Human in a More-Than-Human World: A Feminist Ecocritical Interpretation of Ernest Hemingway’s Novels”は、二十一世紀を特徴づける人新世（アントロポセン）の到来を意識しつつ、これまでのヘミングウェイ批評においてほとんど議論の俎上に載せられることのなかったフェミニスト・エコクリティカルな視座より、彼の代表作『日はまた昇る』（1926）、『武器よさらば』（1929）、『誰がために鐘は鳴る』（1940）、『老人と海』（1952）、『エデンの園』（1986）を徹底的に読み直すことにより、彼の登場人物たちの「エコ」的意識と「エゴ」的意識がいかなる「エコロジカル・アンビバレンス」を織りなしているかを巧みに炙り出した野心的な労作である。先行研究を十分に踏まえつつ、ポスト・ヒューマニズム、マテリアル・フェミニズム、マテリアル・エコクリティシズムなども射程に入れ、個としての「人間」の営みに依拠してきた既存のヘミングウェイ文学研究の見取り図を根本的に刷新し、複雑で多様な生命体が共存する世界の中に彼の文学を定位し直そうとする本論文の構想はまことに壮大であり、独創性に満ちている。本論文は、国際ヘミングウェイ学会の機関誌『ヘミングウェイ・レビュー』など、査読付きの学会誌に掲載された多数の論文を基盤としており、グローバルに英語で論文を積極的に発信し続けてきた筆者の研究者としての並々ならぬ力量を余すところなく示している。

ヘミングウェイ批評における本論文の位置づけを明確に提示した序章に続く、第一章「回復のポリティクスへー『日はまた昇る』におけるジェイク・バーンズによる他者性の受容」は、主人公ジェイク・バーンズの第一次世界大戦における身体的喪失がもたらした心理的トラウマそのものではなく、むしろ自然との接触を通じた自己回復に焦点を当て、それを三段階に分けて考察することにより、ジェイクが多重的な体験を通して自らの他者性を改めて受け入れたことを丁寧に論証している。回復の第一段階としてのバイヨンヌでの釣りの旅、第二段階としてのパンブローナでの闘牛体験、第三段階としてのサン・セバスチャンへの一人旅。そこで彼が、海や空といった自然の媒体を通して自分の中にある声、自分の体、外界といった三つの「他者」と直面し、ありのままの自分を初めて受け入れることができたという「回復のポリティクス」に着目した議論は鮮やかであり、従前のジェイク像を一新する斬新さを備えている。

第二章「『腐った』モノについてーエコ・ゴシックの視点から『武器よさらば』をみる」は、本作に描かれた負の刻印を帯びたモノに焦点を当て、人間の生体がいかに戦争、軍事、医学の言説によって断片化されているかを考察したうえで、エコ・ゴシックの視点を通して、フレデリックが自分の肉体と自然の風景を結び付けることにより、反戦争的なエコ・レジスタンスを追求しているかを精緻に分析している。さらにフレデリックによる自然のゴシック化とロマンティック化が、人間中心主義に依拠する戦争に対する「集団的なレジスタンス」として機能しているという結論は卓見に満ち、『武器よさらば』の批評史に一石を投じるものとして高く評価できる。

第三章「エコフェミニスト・アンドロジニーを原型に『誰がために鐘は鳴る』におけるロバート、マリア、ピラールの関係性」は、スピリチュアル・アンドロジニーおよび陰陽論の視点から、主人公ロバートとマリア、ピラールとロバートとマリア、ロバートと大地、といった3つの関係に見られる「一体化」について考察を行い、この小説の人物構造の原型が、「一つの中に二つ、二つの中に一つ」というアンドロジニーに依拠していることを論証しようとした野心的な論考である。ピラールのアンドロジニー的性質が、彼女のシャーマニズム、ストーリー・テリングの能力と相まって、一体化したマリアとロバートの精神的成長に深い影響を与え、さらに最後の場面におけるロバートの自然との一体化が、内戦を一緒に戦ってきた「スペイン人家族」との結合を意味するという考察は、この小説の魅力を新たな角度から鋭く炙り出すことに成功している。

第四章「『彼の目は海の色と同じだ』―『老人と海』における色のエコロジーとエコロジカル・ポストヒューニズム」では、主人公サンディアゴの「色」との関係、すなわち色の生態学、色の象徴性、色の人種的な意味合いを中心に分析を行うことにより、本作における相互依存的、非人間中心主義的、反帝国主義的志向を海のエコセントリックな観点から浮き彫りにしようとした好論である。青い海の暴力性がサンディアゴのエゴイスティックな欲求を引き起こす一方で、海のヒーリング的性質が彼のエコロジカルな意識に刺激を与えるといったことを指摘したうえで、それを彼の不器用な左手と機能する右手に関する考察へと繋げ、さらには黒人との腕相撲の思い出や魚狩りの戦いのエピソードに開拓者と奴隷の権力関係を読み込んでいく本章の展開はまことにスリリングである。色、光、青い海、海中生物に関わる色のエコロジーの発見が、一種の「カウンター・ナラティブ」として機能しているという結論も斬新である。

第五章「象の目とマジ・マジ戦争―非人間中心視座から『エデンの園』の中の「アフリカ物語」を読む」は、死後出版された『エデンの園』の中のメタフィクション「アフリカ物語」に焦点を絞り、八歳の主人公デビッドと象との共感的な関係をまず分析し、自らのプライドのために象を殺す人間中心主義的な父親との対比において、デビッドの非人間中心視座を鮮やかに描出している。そのうえで、成人したデビッドによる「アフリカの物語」の執筆の内容とプロセスをマジ・マジ戦争との関連において綿密に考察し、トラウマから解放された彼の中には、ある種の非人間中心・ポストコロニアルな男性性がみられるという結論を鋭く導き出している。作中の父子がヘミングウェイの心理的葛藤から生まれた産物であり、彼らは作家の分身であるという解釈は独創的かつ説得力に富む。

結論「再構築されたヘミングウェイの『文化生態学』と『アメリカン・ドリーム』」では、彼の非人間中心視座は「家」という概念と密接に関わっており、意識を無意識に、心を身に、文化を自然に、外部の生態系を内部に再接続し、持続可能性をより倫理的な概念にする可能性を示すヘミングウェイ文学は一種の文化生態学と見なすべきであるという創見に満ちた結論が導き出されている。審査委員からは、ややもすると批評用語がアブリオリに多用されていること、引用の際の検証が必ずしも十分でない箇所が数箇所あったこと、結論部の「文化生態学」と「アメリカン・ドリーム」の連関をめぐる議論が、本論に即してまだ十分練れていないことについて指摘があった。だが、全体としてそうした問題点は、この論文の学術的価値を決して損なうものではない。

査読付きの国際学会誌や国際学会での発信に積極的に取り組んできた執筆者の業績は、国際的にも高く評価されており、今後ともヘミングウェイ研究、エコクリティシズム、アメリカ文学・文化研究の分野において、優れた学問的業績を生み出す資質を有するとの判断がなされた。達意の英文で書かれた159ページに及ぶ本論文は、執筆者の優れた英語運用能力を余すところなく示している。上記考査に基づき、総合的に判定した結果、本審査委員会は全会一致で、本論文が博士（言語文化学）の学位を授与するのにふさわしい論文であるとの結論に達した。